

【報告】

Student Branch Workshop of Tokyo Section 2010 活動報告書

中村 聡

IEEE 東京理科大学 Student Branch

1. はじめに

長谷川幹雄(東京理科大学)

2010年12月18日(土)に東京電機大学・神田キャンパスにて「Student Branch Workshop of Tokyo Section」が開催された。これは、東京理科大学 Student Branch, 東京電機大学 Student Branch, 明治大学 Student Branch が企画し開催したものである。また、IEEE WIE Japan と IEEE Tokyo GOLD の方々にご協力を頂いた。

・意見交換会

開会挨拶・乾杯：青木勇人(IEEE 東京電機大学 Student Branch)

17:50～19:50 意見交

2. ワークショップ概要

2.1 ワークショップの目的

本ワークショップでは、Tokyo Section に所属する Student Branch や学生会員を対象にプレゼンテーションスキルの向上と IEEE の学生会員の勧誘を目的とした。

2.2 ワークショップ内容

本ワークショップは、研究発表などで必要となるプレゼンテーションスキルの向上を目的とした「プレゼンテーションセミナー」と IEEE の活動について知って頂くために「コグニティブ無線ネットワークと標準化」と題して講演して頂いた。

2.3 プログラム

本ワークショップのプログラムは下記の通りである。

・ワークショップ

司会：中村聡(IEEE 東京理科大学 Student Branch)

13:00～13:30 受付

13:30～16:40 「プレゼンテーションセミナー」

中村浩希(第4回 CDWS ファシリテータ)

16:50～17:40 「コグニティブ無線ネットワークと標準化」

3. 当日の様子

当日のワークショップの参加者は関係者も含め24名であった。その人数構成は学生20名(IEEE 学生会員12名, 非会員8名), 一般4名(IEEE WIE1名, IEEE Tokyo GOLD3名)であった。

本ワークショップの内容を以下に記す。

3.1 プレゼンテーションセミナー

プレゼンテーションセミナーには中村浩希(ナカムラヒロキ)様をお招きし、講師をお願いした。

プレゼンテーションセミナーでは、まず中村様からプレゼンテーションにおけるポイントについてお話頂いた。ポイントとして、「声の大きさ」「声のメリハリ」「話のスピード」「クッション言葉」「アイコンタクト」「手のアクション」「姿勢」「表情」の7つがあげられ、それぞれのポイントについて説明して頂いた。

ポイントを意識しつつ参加者が2人1組になり1分間の自己紹介を行った。中村様からメラビアンの法則(「ジェスチャー」「話し方」と「話の内容」における記憶の割合)についてお話頂き、ジェスチャー：話し方：話の内容の割合は、55%:38%:7%と教えて頂いた。プレゼンテーションをするときジェスチャーが大切であるため、6人1グループとなり決められた文章にそりジェスチャーの練習を

【報告】

行った。ジェスチャーの練習では、1人が発表し残りの5人が発表者に対しアドバイスを送った。6人がそれぞれ発表し終わったのち、各グループから代表者1名を選出し皆の前で発表を行った。

次に10人1グループとなり発表者自身に関する発表を行った。発表では、発表者自身の経験から5W1Hのキーワードのみを決め発表を行ったが、ジェスチャーが小さくなってしまふなどのアドバイルが多く聞かれた。

最後に紙に自身の研究内容を記し、写画カメラを用い皆の前で研究に関するプレゼンテーションを行った。発表では、中村様より視線を配りつつジェスチャーを取り入れるようにとアドバイスを頂いたが、実践するのは難しいと皆感じているようだった。



図 1. 自己紹介の様子



図 2. 研究発表の様子

3.2 コグニティブ無線ネットワークと標準化

「コグニティブ無線ネットワークと標準化」と題して東京理科大学の長谷川幹雄(ハセガワミキオ)様にご講演して頂いた。

講演では、コグニティブ無線特に無線 LAN と 3G ネットワークのハンドオーバーについて説明頂き、IEEE の標準化についてお話頂いた。また、現在神奈川県藤沢市で行われている実証実験についてご説明頂いた。



図 3. ご講演の様子

4. 今後の展望

今回初開催したワークショップでは、個人のスキルアップを目的としたプレゼンテーションセミナーと参加者に IEEE について知って頂くための講演を行った。

本ワークショップを続けて行くことにより、自身のスキルアップと他大学との交流を目的に役立てて頂きたいと考えている。次回も開催できる様、他大学と協力して企画して行きたい。また、アンケートを取り本ワークショップの有効性を見極めたいと考えている。

謝辞

本ワークショップを開催するにあたり、多くの方々にお世話になりました。この紙面を借りて皆様に深く感謝申し上げます。